原著論文

スポーツ世界における当為導出の根拠：

ハンス・ヨナスの責任論を手掛かりに¹

森 田 啓 (筑波大学体育センター)²

片 岡 暁 夫 (国士舘大学)³

Abstract

The purpose of this study is to make the mechanism of sport ethics explicit, referring to the relationship between sport world and the world in general.

There lies a difficult problem in the relation between “be” and “should be,” which moral philosophers must deal with. Though we find various kinds of theories for that, this study takes Hans Jonas’ stand. He looks upon the present situation as the crisis of human existence with the environmental disruption resulting from the development of technology. So he asserts that “be” take precedence over “should be” because human beings must exist before we argue on what human beings should be. He also asserts that one way, inter-generational, distant and collective responsibility should be more important than reciprocal, contemporary, direct and personal one. Accordingly, “be” takes precedence over “should be” in the world in general.

How is it in sport world then? In this case, too, sport world must exist before we argue on what should be in sport world. The idea that sport activities are intrinsically good has gone now and we must consider surroundings much more consciously. The world in general must continue to exist in order that sport world can exist. In conclusion, the mechanism of sport ethics must aim not to harm anyone in the world in general. This is the reason for sport world to exist.

Key Words : *Be and Should be*, the Mechanism of Sport Ethics, Sport World and the World in General

キーワード：存在と当為，スポーツ倫理の機序，スポーツ世界と一般世界

¹ The Ground of “Should Be” in Sport World: Through Hans Jonas’ Theory of Responsibility

² Hiraku MORITA, Sport and Physical Education Center, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba 305-8574

³ Akio KATAOKA, Faculty of Physical Education, Kokushikan University, 7-3-1, Nagayama, Tama, Tokyo 206-8515

1. はじめに

筆者らはかつて、「スポーツ倫理問題」の代表的事例である薬物ドーピングの先行研究の検討から、「善 (the good) と正 (the just) の優先性を確定すること、および「存在 (Sein)」から「当為 (Sollen)」を導出する根拠を確定することが、スポーツ倫理の諸問題を解明するために不可欠であると論じ、「善と正」の優先性の確定を試みた¹⁾。この両者の優先性を確定することが重要である理由は以下の通りである。

「スポーツ倫理」の研究では、その基底詞「倫理」が孕む問題と、限定詞「スポーツ」をどのように規定するかという二重の困難さに直面する。前者の困難さは、現在では倫理学は極めて多様な展開をしており、「倫理」とは何かが常に問われることに由来する²⁾。そこで本研究でもあらかじめ「倫理」を確定する必要がある。本研究は規範倫理学、要するに当為に関する学とする。この際、当為を導出する根拠は何か、個人の自己決定と共同体の慣習のどちらを優先する当為を採用するか、つまり「正と善の優先問題」が、課題として設定できる。後者の「スポーツ」についても確固とした定義があるわけではないため、本研究における「スポーツ」を規定する必要がある。本研究における「スポーツ」とは、オリンピック・ゲームズおよびそれに準ずるスポーツ・イベント³⁾であり、独自の規範・ルールによって日常世界から区別された時空間を指す⁴⁾。本研究ではこれを「スポーツ世界」と称する。以上を踏まえると、本研究における「スポーツ倫理」はスポーツ世界の規範倫理とし、スポーツ世界における当為導出の根拠は何か、およびスポーツ世界の「善と正」の優先問題 (いかなる当為を選択するか) を確定することが課題となる。

本研究は、前者 (スポーツ世界における当為導出の根拠は何か) の確定を試みるが、その前に、一般倫理学における「当為導出の根拠」に

関する先行研究を概観しておこう。

「存在と当為」問題は、「事実と価値」、「事実問題と権利問題」とも別称される。当為とは「まさに為すべきこと」をいい、あるがままの姿としての「存在」あるいは「事実」の対概念と位置づけられている。しかし、「事実判断」から「価値判断」が導き出せるか否かは、倫理学の難問であり、論争に終止符が打たれていない。

古代思想から現代にいたるまで、「事実判断」から「価値判断」が導出できるか否かには諸説あり、ここですべてを列挙することは不可能である。しかし、事実と価値との基本的な異質性を明確に指摘し、事実から価値への推論は論理的に誤りであると説いたのはヒュームである。現在では、「事実判断」から「価値判断」が導き出せないという主張は「ヒュームの法則」、そして「事実判断」から「価値判断」を導出することは「自然主義的誤謬 (naturalistic fallacy)」と呼称される。自然主義的誤謬の主張はヒュームにはじまり、カントを経て、今世紀に入ってからは G. E. ムーアが再び主張して注目された。

倫理学においては現在に至るまで、「存在と当為」「事実と価値」問題は論争中である。ヒュームの主張に基づけば、「事実判断」から「価値判断」を導出するには何らかの飛躍が必要となる。しかし、現実問題として、「当為」言明は存在しているし、「当為」は不可避でもある。「当為」を導出するためには「責任や義務」をいかに把握するかが、「存在」からいかに「当為」を導出するかの鍵になるであろう。本研究では、ハンス・ヨーナスの責任論を基礎理論とし、いかにして「存在」から「当為」導出が可能かを確定しようとする。

次に、「当為導出の根拠」に関するスポーツ倫理学における先行研究を取り上げる。スポーツ倫理研究の代表的事例である薬物等ドーピング問題から先行研究を抽出すると、三名の議論がある⁵⁾。この三名は、1984年のオリンピック科学会議・国際スポーツ哲学会主管のシンポジ

ウム「薬物とスポーツ」に登壇した Brown, Simon, Fraleigh である。この三者の主張をまとめると以下ようになる。

まず、Brown⁶⁾が論拠とする原則は自己決定（自律・自立）である。Brown は、スポーツにおける薬物使用の禁止をパターンリズム（父権的保護主義）⁷⁾から吟味し、自己決定の原則を最優先すべきと結論づける。つまり、「われわれが若者に教え込みたい態度、価値には、スポーツマンシップ、正直さ、フェアネス、自己信頼、協力、健康、等があるが、薬物を使用することの自己決定は、こうした態度・価値と対立する」と Brown は述べる。薬物使用による自己危害に関しては、インフォームド・コンセント（informed consent）⁸⁾が前提となるが、実質的なインフォームド・コンセントがある成人選手に対するパターンリズムの適用可能性が論点となる。Brown の結論は、成人選手にパターンリズムは適用できず、未成年選手の場合にだけパターンリズムが適用されるとする。このように、選手の自己決定を優先させると、成人選手（未成年選手を除く）に対する薬物ドーピングの禁止が正当化されなくなる。Brown は、スポーツマンシップ、正直さ、フェアネス、自己信頼、協力といった価値の存在を認めながらも、自己決定の価値を優先させて結論づける。つまり Brown は、善よりも正を優先させる立場と言えらう⁹⁾。このように Brown はスポーツ世界における当為導出の根拠を一般社会の倫理原則のそれに求めている。

Simon¹⁰⁾は、インフォームド・コンセントを前提とした選手自身の選択による薬物ドーピングが不当か否かを吟味し、Brown とは反対に、薬物ドーピングの禁止を認める立場を採る。まず、Simon は、パターンリズム、他者危害、社会悪という原則から検討を始める。薬物ドーピングに反対する理由の一つに、健康上の害（副作用）があるが、他者危害（harm-to-others）、つまり他者に危害を及ぼさない限りという原則を適用すると、愚行と考えられても

自虐行為を禁止するパターンリズムは正当化できない。とは言え、薬物ドーピングにパターンリズムが適用できる場合が二つある、と Simon は述べる。一方は、インフォームド・コンセントが保証されていない時であり、他方は、ある選手の薬物ドーピングによって他の選手が薬物ドーピングに強要（強制）されるという意味で、他者危害を構成する時である。インフォームド・コンセントの保証を前提に、他者への強要について Simon は、薬物ドーピングと危険なトレーニングを対比する中で、薬物ドーピングを行う選手と行わない選手の間が不正、不公平と判断できないとする。また、社会悪について Simon は、青少年の保護というコーチ・親・教師の責任を増大させるべきであり、社会悪だけを根拠にした選手の選択の自由を制限することは不適切と考える。そのため、Simon は、パターンリズム、他者危害、社会悪を根拠にした薬物ドーピングの禁止の正当化を諦め、「競技スポーツは卓越性への相互追求」というスポーツ本質論を基準にしてこの問題に解答する。Simon は、競技スポーツの理想に反する不当な要素が試合に介入すべきではないことを確認した上で、薬物ドーピングは人間としての選手を尊敬しない非人間化につながるために、薬物ドーピングに反対するのである。Simon の主張は、Brown とは異なり、社会における一般原則をスポーツ世界に適用していない点が注目される。

Fraleigh¹¹⁾は、上述の Brown と Simon の立場を比較・検討し、自説を唱える。まず、Brown と Simon の薬物ドーピングに関する倫理的問題点は一致しているという。つまり、両者の問題点の位置づけは、副作用がありながら、説明に基づいて同意した（インフォームド・コンセント）成人選手が競技力向上のために薬物を使用することが道徳的に正しいか否かであり、危害（harm）、強制（coercion）、公正（fairness）という道徳的視点から検討している。Fraleigh は、スポーツの本質もしくは理

念から生じる観念なしには道徳的なスポーツ行為の規定は困難との立場から、理想的な試合(contest)を提示し、そこからスポーツ行為の価値判断を行うべきと考える。Fraleighは、Brownのように自由主義社会における行為の原理・原則から検討するのではなく、Simonと同様にスポーツの理想から接近する。つまり、Fraleighは、薬物ドーピング問題に対して、試合の存在目的から演繹し、1)スポーツの試合は薬物反応能力を比較基準にしていないこと、2)禁止規程がなければ、服用への強制力が一層増すこと、3)薬物ドーピングが一般的に行われた場合、結果的に全体の幸福を損なうことは明らかであることを理由に、薬物ドーピングの禁止規程が正当と結論づける。

この三者の主張から、一般(自由主義)社会の倫理原則がスポーツ世界に適用可能か(Brown)、あるいは、スポーツ世界独自の倫理原則が設定可能か(Simon, Fraleigh)が争点となる。この争点は一般世界¹²⁾とスポーツ世界それぞれの規範や両者の関係が問題となろう。また、倫理学上の問題に照射してみると、「当為導出の根拠」問題に置換できる。なぜなら、スポーツ世界の当為がどうあるべきかについて、一般世界の当為がどうあるかという事実から導出するのか(Brown)、スポーツ世界がどういう世界であるかという事実から導出するのか(Simon, Fraleigh)が問われているからであり、いずれも事実から当為を導出しているからである。このように、従来の先行研究では、スポーツ世界における倫理問題の諸議論に対して、何を当為(正当化)の判断根拠とすべきかについて確定することができない。したがって、本研究の目的は、スポーツ世界における倫理的問題に対して、スポーツ世界は何を当為の判断根拠とするのかを明示することである¹³⁾。

2. ハンス・ヨナスの責任論

本研究の課題とした「存在と当為」の優先性

を確定するために、ハンス・ヨナスの理論を参照する。本章では、ヨナスの理論を紹介しつつ、スポーツ世界の当為導出のための基礎理論として援用することにした理由について説明する。近年、我が国では、ヨナスは環境倫理学者としても注目されている¹⁴⁾。ヨナスはユダヤ人哲学者であり、マールブルグ大学でハイデガーやブルトマンの下に学んだ。ナチス政権樹立後は、イギリスに亡命し、1955年からはアメリカで活動した。渡米後は、ヨナスは哲学者としての立場から、アメリカのプラグマティックな環境思想論争にも直接関与することになる。さらに、一般倫理学上の難問のひとつである「存在と当為」の関係について、ヨナスは直截に解答を与えている。まず、ヨナスの環境倫理思想で注目すべき点は、人間中心主義と人間非中心主義の対立を超えた視点を提供していること、および共時的相互性と通時的責任性という対立構造を指摘していることであるが、さらに「存在と当為」の関係については、人間存在の特徴を再検討し、「存在」をより厳密に考察して解答していることが注目に値しよう¹⁵⁾。よって、本研究ではヨナス理論を基礎理論に据えて課題に迫ることにした。

2.1 ハンス・ヨナスの思想基盤

ヨナスは、ハイデガーの初期の弟子であり、環境倫理思想の基礎理論を提示した人物である。彼はハイデガーが唱えた科学技術の強大化を危惧する考え方を引き継ぎ、現在の時代状況に立脚した新しい倫理学を提唱する。彼の倫理学はアリストテレスとカントの打破¹⁶⁾を意図するが、その根本的動機は、人間的生の合理化に起因する地球環境の危機意識に基づいている。主著『責任の原理』¹⁷⁾において、倫理学的存在論への深化を目指した。

ハイデガーの後期存在思想は、環境倫理思想の展開に裨益するところの多い豊饒な思索を含んでいるといわれている¹⁸⁾。ハイデガーは、エートスという語の根本意義にさかのぼって考

察し、「エートスとは滞留、すなわち住まいの場所（居所）を意味」¹⁹⁾すると位置づけ、倫理学とは本来、行為の当為や規範の追究を任とするのではなく、人間の住み場所を探究する学とする。ヨーナスに与えたハイデガー思想の影響のうち、本研究との関わりで重要なのは「近隣思想」である。近隣思想とは、端的には、存在と人間存在との連関であり、人間が、ものとの近隣性（Nachbarschaft）とか、近み（Nahe, Nahnis）の中で生きることを指す。ハイデガーは、人間が死すべきものとして生きることを忘れ、ひたすら生存の拡張と豊かさのために世界を構築している点を批判し、われわれの存在は、常にわれわれの存在を包んだ全体的な地平への了解以外のなにものでもないとする。このハイデガーの近隣思想こそがヨーナス思想の基礎となっている²⁰⁾。

2.2 ハンス・ヨーナスによる「当為」の導出

他の倫理学者と同様に、ヨーナスにとって、当為を導出する方法論が最大の課題であった。ヨーナスは当為を導く際に、今日の時代状況、つまり人間の生存条件である環境の危機を出発点にし、存在の中に「善」あるいは「価値」を基礎づける²¹⁾。すなわち、善（価値）の可能性は存在がそれを要求するからであり、存在が善（価値）を要求するからこそ当為となる²²⁾。これをヨーナスは当為に対する存在の優先と表現する。従来の倫理学は当為の究明が主たる対象であったが、現代倫理学は、存在の保全に向かうものでなければならない。人間は行為をしたり、また行為を考察するより以前に、まずもって存在しなければならない。よって、存在は原則上自己を肯定し、存在を絶対的なものとしてヨーナスは据える²³⁾。ここで重要な点は、死に向かう生の対照を通じて、存在の自己肯定が強調されることである。生には存在と非存在との明確な対立がある。延命は生存している者による個々の努力である²⁴⁾。

以上にに基づき、ヨーナスは、まず「人類の存

続（未来世代の生存権）を第一義」とし、「当為に対する存在の優位」²⁵⁾を主張した。そこから他の当為を導出する、あるいは「人類の存続を第一義」とするという当為に基づき、他の当為を導出する。ヨーナスのいう「人類」では未来世代の存続が重視されるため、「世代間公正」の達成が目指される。

しかし、ここで現存する人々の存在と未来世代の存在が対立する。つまり、共時的相互性と通時的責任性という対立構造である²⁶⁾。現在の世代は、自然から多くのものを搾取し、また自然に悪影響を与える物質を廃棄してきた。リベラリズムに傾倒する現代社会においては、個々の自由がさまざまな科学技術を発展させ、社会の発展に寄与すると考えられてきた。しかし、ヨーナスは「自由」が進歩の根源ではなく、破壊に通じる点に警告を発する²⁷⁾。地球の空間と資源が有限である以上、無制限の自由、そして現在世代の存在自体が、未来世代の存在を危機に陥らせる。生命科学の最先端では「二百歳近くまで生きる人が出てくる」²⁸⁾と予言されているが、結果として、延命による人口の増加は有限の地球をますます危機に陥れ、未来世代の存在は現在以上に難しくなる。

「人類の存続を第一義」とするヨーナスの主張は明らかに「人間中心主義」である。しかし「人類の存続を第一義」とするためには全体論的な環境倫理の射程が必要であるという。つまり、人間存在は自然との共生によってのみ可能であり、決して存在以上の優先権はない。ヨーナスの唱える人間中心主義と人間非中心主義の融合もここから派生する。種の多様性の維持は、破滅や侵害の防衛に有効である²⁹⁾。このことは、シヴァの「緑の革命批判」³⁰⁾などの意見、主張と一致する。従来は対立関係と捉えられてきた「生命・生態中心主義」と「人間中心主義」は、ヨーナス理論によって、互いに排他的である必要がないことが明らかになる。

以上のように、ヨーナスによれば、存在から当為の導出は不可能というのはドグマにすぎ

ず、存在からこそ当為が導かれるとする。よってヨーナスは倫理学を存在論（＝形而上学）から基礎づけるのである³¹⁾。ただし、角田も指摘しているように、ヨーナスが形而上学を普遍的存在論と捉える点に問題がないわけではない³²⁾。さらに、ヨーナスによって、事実判断から価値判断を導くことはできないとするヒュームの法則の誤りやムーアの自然主義的誤謬が克服されたとは、一概に言い切れない。なぜならヨーナスの考えは、人間の存在自体に価値を認めるからである。ヨーナスの主張は、人間存在を第一義の当為とし、他の当為を導出する構造になっている点が批判されるかもしれない。しかし、事物に価値を与えるのは人間自身である以上、人間の存在を基礎にすえ、そこから事物を捉える視角は重要である。

2.3 ハンス・ヨーナスの新しい責任概念

ヨーナスは「責任」を倫理学の主題としたが³³⁾、彼は従来の倫理学における責任の欠如を指摘する³⁴⁾。彼の提唱する「責任」は従来のものと異なり、生命倫理思想とは射程を異にする環境倫理思想に重要な影響を与えている。

倫理学において責任を言及することは、ある面で当然といえるかもしれない。浜田は、カント倫理学の体系的位置づけにおいて注目すべき点として、「倫理学は人間に対して責務を課する、当為の学としての性格をもつ点が重要である」³⁵⁾と述べる。つまり何をなすべきか、何をなさざるべきかについて、倫理学の視座から責任を明示し、それを課すところまで論述することが必要であるという。だが、ここで採り上げるヨーナスの「責任」は、従来の責任概念に変

更を迫る。

ヨーナスの提唱する新しい責任概念は、従来の同時代的、(地域的な)直接的、個人的、相互(互恵)的責任に代わり、世代間責任、(地域的)遠隔責任、集団的責任、一方的責任である。

伝統的倫理思想の特徴を一言でいうならば、「直接的、同時代的、個人的、互恵的」³⁶⁾である。従来は行為と行為者と結果が同一であったが、現在ではそうではない。未来世代や遠隔地に住む人々が「今・ここ」での行為の影響を受ける可能性がある。その場合、未来倫理・遠隔責任の倫理が要請される。

科学技術が人間の生存基盤を脅かすまでの力をもった現在では、遠隔責任・世代間倫理という視点を導入せざるを得ない。この視点からヨーナスは、遠隔責任の倫理学 (Ethik der Fernverantwortung)、未来倫理学 (Zukunftsethik) を提唱する。ヨーナスは、遠隔責任の倫理学、未来倫理学では、現在の科学技術の力が人類滅亡をもたらす可能性を恐怖として強調することによって第一の倫理原則が発見できるという。彼はその方法を「恐怖の発見法 (die 'Heuristik der Furcht')」と呼ぶ³⁷⁾。

ヨーナスの提唱する遠隔責任の倫理学は地球全体主義に向かう。現在では酸性雨や原子力発電所の事故などの影響は国境を越える問題だからである。

ヨーナスは、将来存在する人類の存在の可能性を将来に開き与えておくことが現代の倫理の根幹であるとする。生あるものは常に延命へと努力するが、いつかは死によって未来世代に存在の場を譲らねばならない³⁸⁾。当為に対する

表1 責任概念の比較

既存の責任概念		ヨーナスの責任概念	
直接的責任	→	遠隔責任	
同時代的責任	→	世代間的責任	
個人的責任	→	集団的責任	
相互(互恵)的責任	→	一方的責任	

存在の優先は、現在世代には「死すべき」点を強調する。無制限に延命を求める行為は、明らかに未来世代の存在と対立する。しかし、本当に現在世代は未来世代の存在を顧慮できるのだろうか。その問いに関してヨーナスは理性だけでなく感情に訴える重要性を指摘する。ヨーナスも、倫理は一方で客観的側面（理性）、他方で主観的側面（感情）をもつと述べる³⁹⁾。人倫的掟の有効性は、すべて主観的条件に依存している⁴⁰⁾が故に、自らの子供、孫という子孫を愛する感情が、未来倫理の実現には不可欠である。従来の倫理学は理性に全面的な信頼が寄せられ、ヨーナスのいう感情、責任感情が欠けている⁴¹⁾と考えられる。

未来世代の存在を顧慮することは、互恵的でない現代人の一方的な責任を主張することであり、従来の「責任」概念の変更を迫る。従来の倫理学では、対等な人格関係を前提にし、同等の人間の尊厳に基づいていた。つまり、義務は権利との互恵関係に立脚していた。しかし、今日の責任は、未来の人間に対してその存在の環境基盤を保全することであり、未来への一方的な責任こそが要求される。現代人の未来への義務は一方的であり、責任の絶対的一方的重さをもつ。ヨーナスの主張の主旨は、責任が生じるのは、何らかの影響を与える側にのみ生じる点である。特定集団の現状維持のためには、影響を与える側と与えられる側で考えると、影響を与える側に倫理が必要となる。影響を与える能力がない場合には倫理的責任は生じない。ヨーナスの責任は、一方が果たし他方が受けるものである。ヨーナスはこれを説明する例として

「親と新生児」、「政治家と国民」の関係を挙げ⁴²⁾。親子関係において、親は誕生直後の子供に対して倫理的責任（もちろんそのみに限定されない）が生じるが、誕生直後の子供は親に対して倫理的責任を果たすことはできない⁴³⁾。政治家は国民の利益の衝突を調整するだけでなく、長期的展望に立ち、持続可能な社会を構築せねばならない。これら二つの関係においては互恵の関係が成立しない。これらの関係では「賭」を回避する慎重な態度の必要性を説く。未来世代が将来の科学技術の発展によって問題を克服するだろうとの楽観的な態度は承認できないのである。この一方的責任の理論を時空間に拡大すれば、世代間倫理と遠隔責任の倫理に繋がる。

さらに従来の倫理学では責任や義務の主体はあくまで個人に帰せられていた。しかし、ヨーナスの提唱する倫理学は、人間の共同存在、さらに集団存在にそれを求め⁴⁴⁾、個人・現在だけでなく集団・将来を考慮に入れることを要請する。

ただし、ここで注意すべき点は、集団的責任を唱えるからといって個人的責任が皆無ではない点である。個人に先立つ共同体を優先する本研究の立場では、一般世界が所与として与えられるため、社会が個人の行為の形成に影響を与えることは間違いない。しかし個々の具体的事象から見れば、個人の行為こそが社会を形成しているものであり、個人的責任が皆無になるわけではない。

ヨーナス理論では、環境世界を考慮して一般世界が決定される。人間存在に関しては、まず

図1 一般世界の当為導出の優先順位

未来世代の存在を考慮した上で、現在の集団レベルの存在が問われ、それに基づいて個人レベルの存在が決定される。

3. ハンス・ヨナスの責任論からみたスポーツ世界の当為導出の根拠

本研究の射程とするスポーツ世界は、1896年近代オリンピック誕生時に西欧という一般世界において、「世界平和」と「個の完成」という理念を掲げて成立した特殊世界⁴⁵⁾である。しかし、特殊世界はそれを取り巻く外部環境と全く独立して存在していない点は重要である。その意味で、特殊世界であるスポーツ世界も一般世界との関係は断つことができない。また両者の関係を考える場合、あくまで基底は一般世界である。一般世界なしにはスポーツ世界も存在しない。さらに、一般世界は環境世界(Umwelt)があってはじめて成立可能という二重構造をなしている。

ヨナスの主張⁴⁶⁾に従えば、一般世界の基盤である環境世界の維持を前提に、一般世界を維持することが人類共通の普遍的な原則として導き出せる。これはスポーツ世界全体にも当てはまるであろう⁴⁷⁾。

スポーツ世界は一般世界とは異なり、人間が存在(生存)するために不可欠な世界ではない。さらに、一般世界が環境世界を成立基盤としてるように、スポーツ世界は一般世界を成立基盤としている。これは当然のことであるが、従来はこのことが軽視されてきた。人間が生存できる環境世界がなければ、たとえば水や空気が必要ならば、人間が生きる一般世界などは存在できないはずがない。同様に、一般世界が維持されていなければ、スポーツ世界が形成されるはずはない。

そこで本章では、ヨナスの理論に基づいて、スポーツ世界の当為導出の根拠について考察する。

3.1 スポーツ世界の存在論

スポーツ世界における「当為」導出の根拠はどうか。まずスポーツ世界の「存在」について考えてみよう。一般世界の存在には三つのレベルの存在が想定された。1)個人レベルの存在、2)集団レベルの存在、3)世代間レベルの存在である。

スポーツ世界の存在の場合も、同様に三つのレベルから捉えられる。1)スポーツ世界における個人の存在、2)スポーツ世界自体の存在、3)スポーツ世界における世代間レベルの存在である。その際1)から3)すべての基盤として一般世界がある点を忘れてはならない。

初めに、2)スポーツ世界自体の存在から考察する。スポーツ世界における「当為」導出の根拠については、一般世界のそれをそのまま当てはめられない。なぜならば、スポーツ世界は一般世界とは異なり、スポーツ世界で第一義的に「存在」を確保する必要がないからである。スポーツ世界がなくても人間の生存に直接には関係ない。よってこの問題に解答するためには、スポーツ世界における「存在」のあり方、いわば、スポーツ世界の存在論の検討がまず必要となる。

前述のように、スポーツ世界は一般世界とは異なり、スポーツ世界自体の「存在」が人間の生存とは無関係である。にも拘らず、スポーツ世界はなぜその存在が認められるのか。存在の根拠が示されれば、維持される必要性も認められる。よって、スポーツ世界の存在意義を明らかにする必要がある。

存在論とは何か。認識論の問いは「私たちの思惟はいかにして存在(=ある)を正しく言いあてることができるか」であるのに対し、存在論は「あるとはいったいどういうことか」と問う。存在論は「ものごと」の存在の意味を探ろうとする。存在の意味を探る存在論は、ものはなぜ、また何のためにあるのか、と問う⁴⁸⁾。したがって、ここではスポーツ世界がなぜ、何のためにあるのかを問うことが課題となる。

スポーツ世界の存在意義は、人間本質の一つである差異化・卓越化の発揮と捉えられる。スポーツ世界は一般世界からの解放であり、異なる種類の興奮を生み出す世界といえる。近代以降のスポーツ世界は、差異化・卓越化の場として成立し、スポーツ世界参加者やそれを取り巻く人々の差異化・卓越化によって維持・変化してきた。したがって、スポーツ世界の存在意義は、人間本質の一つである差異化・卓越化の発揮を最大限に肯定する、自由主義思想に基づく社会において最大となる⁴⁹⁾。

スポーツ世界は、人間本質の一つである「差異化・卓越化」の発揮として存在意義が認められる。ただし、それは一般世界とは異なり、条件付の存在である。つまりスポーツ世界は一般世界を存立基盤としているので、スポーツ世界が一般世界、さらに一般世界の基盤である環境世界を破壊してはならないのである⁵⁰⁾。

次に、1) スポーツ世界における人間存在について考えれば、一般世界とスポーツ世界の関係と同様に、すべての人は一般世界で生きていくし、生きていくほかない。スポーツ世界のみで生きていくことはできない。個人は一般世界とスポーツ世界を往来するが、必ず一般世界に復帰しなければならない。よって、スポーツ世界と一般世界との往来は、可逆的行為でなければ認められない。

最後に、3) スポーツ世界における世代間レベルの存在については、2) に含めて考えるこ

とができる。スポーツ世界が未来においても存在できるか否かは、スポーツ世界が一般世界に対して責任を果たすか否か、つまりスポーツ世界の存在自体あるいはスポーツ世界における参加者の行為が未来世代の一般世界における存在を確保できるのか否かに拠る。

3.2 スポーツ世界の当為導出の根拠

価値観に関して、一般世界とスポーツ世界の事実関係を踏まえれば、一般世界の価値観の変化は、スポーツ世界の価値観形成に強い影響を与えてきた。だが、一般世界とスポーツ世界との関連については、両者が本来どのようにあるべきかが問われる。この課題こそがスポーツ世界の今後の方向性を左右する重要なポイントである。倫理学の領域における「存在と当為」の点から考察すると、一般世界とスポーツ世界の両者が対応する必然性は全くない。したがって対応する可能性も当然あるのだが、対応させるべきかどうかを考察する必要がある。

「存在」の観点からのスポーツ世界、一般世界、環境世界の三者関係は、スポーツ世界は一般世界を存立基盤とし、さらに一般世界は環境世界を存立基盤にする包摂的依存構造を構成している。よってスポーツ世界が一般世界の維持を妨げることは許されない。人間の生存にとっては、一般世界さえ維持できれば、特殊世界の存在は任意である。しかし、特殊世界の存在が認められるためには⁵¹⁾、特殊世界が一般世界

図2 スポーツ世界の当為導出の優先順位

の維持を妨げない条件を満たすことが必要となる。以上の点を踏まえると、スポーツ世界の存在および秩序維持には、論理的に一般世界における存在の確保が前提となる。

以上のことから、スポーツ世界内の特定集団の秩序を維持する以上に、一般世界の秩序維持が最優先となる。したがって、本研究では「当為に対して存在」を優先すべき（ヨナナス流の言い方）と結論付ける。換言すると、スポーツ世界においていかに行為すべきかという当為云々以前に、スポーツ世界の存在自体が一般世界を存立基盤としていること、したがって一般世界の維持を困難にするならば、スポーツ世界における人々の行為やスポーツ世界の存在自体が認められない、という意味において「当為に対して存在」が優先されるべきと結論付ける。厳密に言えば、人間存在の存続を第一義とし、それに基づいて他の当為（一般世界もスポーツ世界も）を導出すべきとする。

ヨナナスの責任論からすれば、冒頭の薬物等ドーピング議論の結論はいずれも受け入れられない。スポーツ世界はもとより、一般世界もまた、環境世界に拘束されている。未来世代の人類存続のための環境世界の存在確保自体を、当為導出の根拠としなければならない。以上が本研究の結論である。以下では筆者らの先行論文と本研究の成果をまとめる。

4. おわりに：スポーツ倫理の機序およびスポーツ世界の方向性

以上の考察より、スポーツ倫理は、スポーツ世界を維持するための調整技術であるだけでなく、一般世界を維持することも含む独自の調整技術となる。本研究は、筆者らの以前の研究⁵²⁾と並列、あるいは延長線上に位置づく研究である。両研究に基づくと、筆者らの主張するスポーツ倫理は、スポーツ世界が1)一般世界に対して責任を果たすこと、2)スポーツ世界を構成する参加者の共同体を形成・維持する

責任を果たすこと、の二つの側面からなる。スポーツ倫理は、スポーツ世界が一般世界において存在できる条件を示すものであると同時に、スポーツ世界の方向性を示すものでもある。

「存在」を重視するヨナナス理論と、「善」を優先する共同体論は、補完的關係にあると捉える必要があろう。「存在」そして「善」を優先することによってのみ、人間の存続という条件が満たされると考えられる。これまでのスポーツ世界は、その存在が自明と見なされ、未来永劫まで持続できるとの幻想に立っていた。スポーツ活動が本来的に「善」とする幻想時代は過ぎ去り、人間の存在にも配慮した活動が求められている。

本研究では、ヨナナス理論に依拠し、人間の存在を第一義として、それ以外の当為を導出する必要性を唱えた。しかし、その人間存在自体は、環境世界から見れば「脅威」であるとの視点が必要となろう。生態系からはみ出した存在である人間は、環境あるいは他の生物を搾取することによってしか生存できないからである。さらにその人間が行う「スポーツ」も環境世界からすれば「脅威」である。環境世界にとって、人間がスポーツをすることはしないことに比べて間違いなく迷惑である。例えば、最も環境に害が少ないと思われるジョギングでさえ、それを行わないことに比べれば二酸化炭素の排出量が増える。現在必要なことは、人間存在は肯定しつつも、人間存在は環境世界に対して、そして人間が行うスポーツも基本的に「迷惑」であることを自覚することであろう。そして「環境」「他者」に対して配慮をもって行為する原則、そしてそれを可能にするシステムを構築することである。各自の「自由」や「権利」を主張するだけでは困るのである。

本研究は、ヨナナス理論に依拠し、「当為に対する存在の優先」および従来の責任概念に代わる「集团的、一方的、世代間的、遠隔責任」という新しい責任概念の適用を試みた。近代的自我を基礎とするリベラリズムは、権利主体で

ある各個人の自由な行動が社会を進歩させると考えてきた。しかし、ヨナスも主張しているように、現在では自由は進歩というよりも破壊者である点を意識する必要がある。進歩思想は一般世界の基盤である環境世界を破壊しつつある。人間の存続を肯定する限り、進歩思想から循環思想への転換は不可欠である。持続可能な社会実現のためには、私たちの「世界観」を変える必要がある。なぜなら各自「権利」を主張する以前に、私たちは地球、国家、そして家族という共同体の一員だからである⁵³⁾。

なお、本研究を終わるにあたり、出発点であった薬物ドーピング問題の先行研究に対して一言付加する。スポーツ世界の倫理原則として、一般世界のそれを適用しようが (Brown), スポーツ世界独自のそれを設定しようが (Simon, Fraleigh), 一般世界の存立を脅かすものは認められない。一般世界の倫理原則を適用する際には、Brown のいう自己決定を優先する立場は、本研究に基づけば認められない。スポーツ世界独自の倫理原則を設定する場合には、それが一般世界の存立にどのような影響を与えるかを考慮する必要がある。前述したように、本研究は薬物ドーピング問題そのものに対する示唆を得ることを目的としていない。薬物ドーピングが、一般世界の存立にどのような影響を与えるかについては、他日を期したい。

注および引用・参考文献

- 1) 森田 啓, 片岡暁夫, 近藤良享. (1998), スポーツ世界と一般世界における「善と正」に関する一考察—Schneider と Burke の論争から—, 体育・スポーツ哲学研究, 第20巻第2号, pp. 25-43. 筆者らは、スポーツ世界の「存在と当為」の優先性を確定することは、「スポーツ倫理の機序」を明らかにし、「善と正」の優先性を確定することは、「スポーツ世界の方向性」を明らかにすると考えるが、その理由は本研究で明らかになると思われる。
- 2) 例えば、日本倫理学会編. (1988). 倫理学とは何か, 慶應通信.
- 3) オリンピズムの理念を受け入れる競技団体が主催する競技会.
- 4) ボクシングを思い浮かべれば分かり易いと思われる。グローブやヘッドギアをしていようがいまいが、路上で殴り合うことは認められない。これに対し、リング上でなら認められる。
- 5) ただし、本研究では具体的事例とした薬物ドーピングの是非を論ずるのではなく、スポーツ世界における当為をいかに導出するかを論ずる。よって、本研究における結論を具体的事例に適用する試みは、稿を改めて行うことになる。
- 6) Brown, W. H. (1984). "Paternalism, Drugs, and the Nature of Sports" in *Journal of the Philosophy of Sport*, XI, pp. 14-22.
- 7) パターナリズムとは、簡単に言えば「善意に基づいて干渉、統治すること」であり、保護するというニュアンスが強く働いている。現在実施されている具体例としては自動車のシートベルトやオートバイのヘルメットの着用がある。
- 8) インフォームド・コンセントとは、説明に基づく同意などと訳され、最近特に医療行為の際にその重要性が指摘されている。インフォームド・コンセントとは、簡潔にいうと、医療現場では、医師は必ず患者の病状およびどのような処置をするかについて説明し、患者の同意を得たうえで、治療を開始することである (水野肇, (1990). インフォームド・コンセント (中公新書), 中央公論社, pp. 1-2.)。
- 9) 本研究における「善」は共同体論者の指摘する「善」を指す。この「善」とは個人を超えた共通の価値観、伝統を指すため、Brown の文脈でいえば、スポーツマンシップ、フェアネス等、スポーツ世界が伝統的、共通に保持してきた価値観を指す。一方「正」とはリベラリストの指摘する「正」であり、権利主体としての個人が、各自それぞれ「善」を選択することを指す。Brown の文脈では、スポーツマンシップやフェアネスというスポーツ世界の「善」を選択するか否かは各自の自己決定に基づくことになる。
- 10) Simon, R. L. (1984). "Good Competition and Drug-Enhanced Performance" in *Journal of the Philosophy of Sport*, XI, pp. 6-13.
- 11) Fraleigh, W. P. (1984). "Performance-Enhancing Drugs in Sport: The Ethical Issue" in *Journal of the Philosophy of Sport*, XI, pp. 23-29.
- 12) 本研究における「一般世界」とは、動物が生きるといった生態系に組み込まれた自然的な世界とは異なる「人間世界」、つまり私たち人間が日常生活している世界のことを指し、フッサールのいう「生活世界 (Lebenswelt)」と同義とする。この世界は「環境世界 (Umwelt)」の対立概念である。

- 13) 本研究では、当為導出の判断根拠を、ハンス・ヨーナスの責任論から考察する。本研究では「存在」から「当為」をいかに導出するかの確定を試みるが、ここで「存在」という用語の説明が必要となる。一言に「存在」といっても多様に捉えることができるからである。つまり人間存在なのか、スポーツ世界自体の存在なのか、人間存在にしても私の存在なのか、他者も含めた存在か、どの範囲の他者を含めるのか、さらには未来世代を含めた存在なのか。筆者らは、この「存在」について重要な示唆を与えるのがハンス・ヨーナスと捉える。ここでは「存在」を規定せずに先に進むが、「存在」をどう捉えるべきかについては本論が進むにつれて明確になる。
- 14) 加藤尚武. (1991). 環境倫理学のすすめ, 丸善, p. 225., 高橋広次. (1991). 環境倫理学と現在, 阿南成一他編. 自然法的多義性. 創文社, p. 240. など.
- 15) スポーツ世界と環境倫理思想, および環境倫理思想におけるヨーナスの位置づけ, ヨーナス理論の特徴については, 稿を改めて論じる予定である.
- 16) アリストテレスもカントも理性 (前者は真理の純粹観念としての理性, 後者は他者を自らと同じ自由な存在として承認する行為的理性) に絶大の信頼を置き, そこから倫理学を作っている. 彼らは時代状況に立つ人間よりも, 歴史を超えて存在する人間に立脚している. (角田幸彦. (1993). 歴史哲学としての倫理学, 東信堂, p. 168.)
- 17) Jonas, Hans. (1979). *Das Prinzip Verantwortung*, Frankfurt am Main. (Dritte Auflage, 1993.).
- 18) 高橋広次. (1991). 環境倫理学と現在, 阿南成一他編, 自然法的多義性, 創文社, p. 224.
- 19) ハイデガー (桑木務訳). (1958). ヒューマニズムについて (角川文庫), 角川書店, p. 60.
- 20) 角田幸彦. (1993). 歴史哲学としての倫理学, 東信堂, p. 192.
- 21) Vgl. Jonas., S. 153.
- 22) a.a.O., S. 153.
- 23) a.a.O., S. 155.
- 24) a.a.O., S. 157. このような考え方にに基づき, 特に近代医学は延命に努力してきたと言える.
- 25) a.a.O., S. 96-102.
- 26) 加藤尚武. (1991). 環境倫理学のすすめ, 丸善, p. 225. 加藤はこの点を高く評価する.
- 27) Vgl. Jonas., S. 157.
- 28) 日本経済新聞 (13版), 生命のビッグバン, 1999年1月12日1面.
- 29) Vgl. Jonas. S. 156.
- 30) V. シヴァ (高橋由紀, 戸田清訳). (1997). 生物多様性の危機, 三一書房. など.
- 31) Vgl. Jonas. S. 8., S. 35.
- 32) 角田, 前掲書, p. 187.
- 33) Vgl. Jonas. S. 9.
- 34) a.a.O., S. 165.
- 35) 浜田義文. (1988). 倫理学とは何か—近代倫理学の検討を通じて, 日本倫理学会編, 倫理学とは何か, 慶應通信, pp. 39-42.
- 36) 例えば今道は, 「責任」という語は18世紀後半に概念化されたが, その背景には, 近代的自我が確立し, 各個人が直接相手と向かい合ったためと指摘する. そこでは対等な人格関係が責任の前提条件となっていた (今道友信. (1990). エコエティカ, 講談社). 従来の「責任」概念は個人的, 同時代的, 直接的, 互恵的であったといえる.
- 37) Vgl. Jonas. S. 7-8. この「恐怖の発見法」は, 今後の倫理原則を設定する際の基本になると考えられる. 多くの環境思想は, 持続可能なユートピアが建設できると主張するが, ヨーナスはこれと対照的な見方を奨励する. 持続可能な世界を目指しつつも, 人間が存在することは, 他の生命の犠牲の上にしか成り立たないことを自覚する必要がある (森岡正博. (1994). 生命観を問いなおす (ちくま新書), 筑摩書房. 参照).
- 38) a.a.O., S. 157.
- 39) a.a.O., S. 163.
- 40) a.a.O., S. 164.
- 41) a.a.O., S. 165.
- 42) a.a.O., S. 172-183.
- 43) 影響を与える側与えられる側ということで考えると, 倫理を人間の関係だけに限定することは適切ではない. 人間は一般世界をはみ出して自然的世界 (自然) に対しても影響力を持っている. したがって当然「環境倫理」を考慮に入れる必要がある.
- 44) a.a.O., S. 37.
- 45) 本研究における「特殊世界」とは, 一般世界から一部の人々が独自に形成した共同体であり, 一般世界とは異なる独自の価値観, 規範を有することもある. スポーツ世界の他には, 芸術世界などが考えられよう.
- 46) ヨーナスの主張を振り返ってみると, ヨーナスが当為 (Sollen) に先立って存在 (Sein) を優先するということは, まずは一般世界 (これは環境世界を成立基盤とする) の維持が人間が存在するためには不可欠だ, ということであった. このような存在から当為 (環境倫理) が導かれ

た。ならばスポーツ倫理で一般世界に対応するスポーツ世界とはいかなるものか。換言すると存在論に基づくスポーツ世界とはいかなるものか。以下考察を進める。

- 47) 本研究では、従来の個人的責任に加え集団的責任の重要性を認める。このような環境倫理学に基づくことにより、本研究では集団の責任について言及することが可能となり、また言及する必要がある。
- 48) 竹田青嗣。(1984)．ハイデガー存在論への展開，現代思想・入門，宝島社，p. 65.
- 49) この差異化・卓越化が認められる範囲を決定するのが，倫理の課題といえる．存在論に基づいてスポーツ世界を基礎づけることによって，ス

ポーツ倫理学研究が可能となる．本研究がヨーナスの理論に依拠するということ，つまり存在論に基づくということは，生命倫理ではなく環境倫理を基礎とするということである．

- 50) この点に関しては基本的に一般倫理が適用できる．ただしこの一般倫理も，従来の生命倫理からヨーナスらが主張する環境倫理に基づくものに变化する必要がある．
- 51) 現代では人間の自由な差異化の発揮として認められる．
- 52) 森田 啓，片岡暁夫，近藤良享，前掲論文．
- 53) もちろん本稿は人間のすべての権利を否定するものではない．

受付 1999年 9 月27日

受理 2000年 7 月24日